

近代日中学術用語の研究をめぐって

荒川清秀

はじめに

近年来、日中での近現代漢語、とりわけ學術用語の研究が日本のみでなく、香港、大陸、そして西欧圏においても盛んになりつつある。日本でその先鞭をつけたのは中国語学者沈国威による『近代日中語彙交流史』（沈国威一九九四）である。近代における日中の語彙交流を考えると、その中核となるのは日本語から中国語へという流れであり、沈がまずこの点に注目したのは慧眼であった。

日本語から中国語への語彙の流入の研究というとき、日本ではつとに、さねとう・けいしゅう（実藤恵秀）『中国人日本留学史』（くろしお出版、一九六〇）、香港では譚汝

謙『近代中日文化関係研究』（香港日本研究所、一九八八）、大陸では高名凱らの『現代漢語外来詞研究』（文字改革出版社、一九五八）その発展としての『漢語外来詞詞典』（上海辞書出版社、一九八四）があるが、残念なことは、かれらが在华宣教師・西洋人たちによる翻訳書、英華・華英の辞書の類をほとんど参考にしていないことである。これは中国人についていえば、単に国粹的な立場から無視したというよりも、そうしたものが中国では容易に見ることができない、あるいは存在しないということからきているだろう。たとえば、汪家燊一九九七を読めば、印刷史研究者のあいだにおいてさえ、近代における最初の中国語辞典であるモリソンの *A Dictionary of the Chinese Language* をみることがどんなにたいへんであるかがわかる。日本では本

学を始め公共機関に一五点もあり、その複製本（ゆまに書房）さえ存在するというのである。また、のちに述べるロブシャイトの英華字典も、中国国内において所蔵するという図書館を聞かない。沈国威一九九四が実のある研究となつてゐる一つの原因は、中国においては見ることでできない多くの資料を日本において直接手にとつて見ることができたからである。ともかく、在華宣教師たちの著作が注目され、調査がすすむにつれ、従来日本起源とされてきた漢語の中に、明治維新より前に中国にやつてきた宣教師・西洋人たちによつてつくられたものがあることが徐々にわかつてきたし、語彙交流の流れがあるときは錯綜したものであることもわかつてきた。

在華宣教師たちの資料は、一部ではあつたが早くから日本の国語学者に注目されていた。山田孝雄、古田東朔らは一九世紀以降に來華したプロテスタント宣教師たちの一部の著作をとりあげているし、森岡健二は、明治初期における英和辞書や翻訳書が、その訳語の多くをロブシャイトの『英華字典』（一八六六―一八九九）に負つてゐることを指摘していた（森岡一九六九）。こうした面では日本の方が中国より先を歩んでいたのである。沈国威はこうした日本の成果に学び、資料を利用すると同時に、一方で中国人としての利点を生かし、清末から明治初期に來日した中国人外交官たちの旅行記に着目し、その中における日本語彙の影

響について考証した。中国人外交官たちの文章は文語文であり、日本人研究者が利用するには決してやさしいものはなかつたからである。

筆者はこの十年来、主に日本の国語学から刺激を受けつつ、日中における共通の漢語とりわけ地理学用語の起源と伝播の問題にとりくみ、一九九七年の秋に『近代日中学術用語の起源と伝播——地理学用語を中心に——』を白帝社より上梓した（以下荒川一九九七とする）。筆者がここであつかつた語は「熱帯」等の五帯の名称、「回帰線」「海流」「暖流」「寒流」「貿易風」「半島」等わずかなものにすぎないが、単に語の初出を提示するだけでなく、こうした語を通しながら、日中で訳語が生まれるときのしくみを明らかにし、伝播の過程をさぐるうとした。さいわい、『学燈』『毎日新聞』『日本経済新聞』『中国図書』『東方』『しにか』『地理学評論』等において多くの異なる分野の方から紹介批評をいただいたし、日本科学史学会年会（一九九八・五・三〇）、中部日本語研究会（七・二五）、ドイツ、ゲッチンゲン大学の「近現代漢語学術用語」プロジェクトとの交流シンポジウム（九月）等での講演、報告を通して、各分野の方々と議論を交わし、質問を受ける中で問題点をより明確にすることができた。本稿では、そうした点を中心に荒川一九九七を補訂したい。

一 どのような資料をみるべきか

(一) 地理書

上で、従来の中国での研究が資料面で大きく制約を受けているということ述べた。これは一九九三年七月来、香港で近現代漢語の語誌の探求を続けている香港中国語文学会の『詞庫建設通訊』や近年この分野の大きな成果であったイタリア人マッシーニの著 (Masini 1993) ともそうして、日本にすれば当然見ることのできるような大切な資料を多く見のがしているのは惜しまれる。

語の起源を追究する過程で、たとえその存在がわかっていても、すべての資料に目を通すということは困難なことである。問題はどのような資料が、その語を問題にする上で避けて通れない、カギとなるものであるかだ。ここでは筆者が荒川一九九七を書く過程で利用した資料、ならびにその後気のついた資料について述べてみたい。当然ながら資料は地理学を中心とするものとなる。

地理学関係としてはまず、

○一六〇二 利瑪竇(マテオ・リッチ)『坤輿万国全図』
を見なくてはならない。本図のほぼ完全なものは世界に三
組しか残っていない。そのうちバチカン教皇庁図書館にあ

るものは、デリア神父によって注釈つきの大冊が出ている (D'elia 1938)。マッシーニが利用したのはこれである。

日本では京都大学付属図書館と宮城県図書館にあって、前者は秋岡一九八八に収められている。後者は織田・室賀・海野一九八六『日本古地図大成 世界図編』(講談社)や宮城県文化財保護協会の複製図で見ることができ、ともに現在絶版。一九九六年に京都の臨川書店から原寸大の複製版(三二枚組)が出、宮城図でははつきりしなかった部分もこれによって読みとることができるようになった(ただし価格は一〇万を越える)。活字本としては京大図に基づく鮎沢一九四四があり、原図の写真と対照して利用すればきわめて有益である。リッチではこの一六〇二年図がもっとも重要なものであるが、リッチの用語の変遷をみるには、

○一五八四 輿地山海全図(『圖書編』所収)

○一六〇〇 山海輿地全図(『月令広義』『三才図会』所
収)

○一六〇五 乾坤体義「天地渾儀説」(四庫全書本、神
戸市立博物館秋岡文庫)

をも参照しなくてはならない。ちなみに、『乾坤体義』には一六〇二年図でフリーズにすぎなかった「熱帯」が語として出ているし、一六〇二年図にはなかった「寒帯」が使われている。

〇一六二三 艾儒略(アレニ)『職方外紀』

地理学用語ないし一七世紀以降におけるイエズス会士たちの翻訳活動、訳語の創造を考える上で、リッチについて重要なのはアレニの『職方外紀』である。いや日本への伝播、日本の蘭学者への影響、そしてその後の中国への日本語の移入を考えると、リッチ以上に重要な著作であるといえよう。本書はいくつかの叢書に収められているが、もっとも信頼できるのは『天学初函』(尾張徳川家の蓬左文庫にある。台湾学生書局にも複製本がある)に収められたものである。一九九六年に中華書局より謝方の校訂注釈本が出て利用がいつそう便利になった。

アレニは『職方外紀』において、五帯の名称として「熱帯、温带、冷帯」をあげている。「温带」以外はリッチ図の説明を受け熟語化させたものである。荒川一九九七ではアレニの著作として『職方外紀』しか利用しなかったが、アレニにはこのほか『西方要紀』(昭代叢書)『西学凡』(天学初函)『西学答問』がある。このうち、アメリカハーバード大学に拠点を置き、ヨーロッパの図書館を踏査してきた関西大学の内田慶市氏が入手した『西方答問』には「冷帯」ではなく「寒帯」が出ている。荒川一九九七では、アレニはリッチの『乾坤体義』の「寒帯」を見ていないと考えたが、アレニは見ていたのである。

リッチとアレニについて重要なものはつぎのフェルビー

ストの著作である。

〇一六七四 南懷仁『坤輿図説』

(指海叢書本、秋岡文庫本、京大人文研本)

南懷仁『坤輿全図』

(神戸市立博物館蔵名品図録)

〇一七六一 蔣友仁『地球図説』

(文選樓叢書本、日本『他山之石』所収)

以上は一七世紀から一八世紀にかけてのイエズス会士たちの著作だが、一九世紀以降のプロテスタント宣教師たちの著作の量はこれらをはるかに上回る。そしてそこには中国人開明官僚による著作も加えなくてはならない。そのうちまず、かつて中国の言語学者王力が『漢語史稿』下(語彙)でとりあげた魏源の『海国図志』を問題にしよう。『海国図志』は、魏源生存中に三回版が出ているし、それ以後も何回も出ているが、今主なものをあげると、つぎのようになる。

〇一八四四 五〇巻本(京大人文研)

〇一八四七 六〇巻本(台湾成文出版社複製本)

〇一八四九 六〇巻本

〇一八五二 一〇〇巻本(咸豊二年、京大人文研、国会

図書館等)

〇一八七六 一〇〇巻本(光緒二年、平慶涇道署刊本)

光緒六年重刊本／愛知大学図書館

○一八九五 『増広海国図志』一二五巻本（韓国圭庭出版社複製本あり）

『図志』は巻頭の「籌海編」を除けば西洋人や中国人の著からの引用が大部分を占め、その中には後に失われた本もある。ところで、王力もいうように『図志』に出てくる新語は『図志』が出る以前に存在していたものである。したがって、『図志』をより有効な語誌の資料として利用するには、『図志』一〇〇巻本にあるというより、『図志』〇〇巻本引く「美理哥合省国志略」（初版一八三三）にある、のように書くべきであろう。

『図志』の五〇巻本は所蔵するところが少ないが、ないわけではなく、日本では京大人文研、中国では中国科学院図書館等が所蔵している（いずれも一八四四年本）。また、『小方壺齋輿地叢鈔』には『図志』に引かれている書が多く収められているが、これも安易に引用するのは危険である。というのは、魏源においても他書からの引用は誤脱が多いからである。なお、王力が利用したのは一〇〇巻本、マッシーニが利用したのは一二五巻本と台湾成文出版社六〇巻本である。

『図志』には西洋人、中国人たち先人の文献が多く採られているが、魏源自らは地理学用語や近代用語を創造するということをほとんどしていない。むしろ、上であげたり

ツチたちをはじめとする西洋人たちの著作をまとめたかたちで後世に伝えたという点を評価すべきであろう。訳語の創造にほとんどあずからなかったという点では魏源につぐ徐繼畬の『瀛環志略』（一八四八）も同じである。訳語創造に積極的に関与したのは、やはりつぎにあげる西洋人の手になる地理書である。（一）内は筆者が利用した書の所在、特記がないものは架蔵である。BLはBritish Library（英国図書館）のこと。

- 一八四七 Marques 『新釈地理備考』（海山仙館叢書）
- 一八四八 Way 『地球図説』（宮城県図書館）
- 一八四九 Hobson 『天文略論』（BL）
- 一八五三—六 『遐爾貫珍』（BL）
- 一八五三—四 Muirhead 『地理全志』（BL、宮城県図書館）
- 一八五五 Hobson 『博物新編』（関西大学）
- 一八五六 Muirhead 『英国志』（愛知大学）
- Way 『地球説略』（愛知大学）
- Legge 『智啓蒙塾課初歩』（BL）
- 一八五七—八 Wylie 『六合叢談』（BL、宮城県図書館）
- 一八五九 Wylie 『談天』（愛知大学）
- 一八六二 Bridgman 『大美聯邦志略』（内閣文庫）
- 一八七三 『地学浅釈』
- 一八七四 Wylie 『談天』（愛知大学）

〇一八七六 Williamson 『格物探原』(関西大学)

Fryer 『格致彙編』(南京古籍書店複製本)

〇一八七七 Kreyer 『測候叢談』

〇一八八二 Fryer 『地質須知』(BL)

〇一八八三 Fryer 『地理須知』(BL)

〇一八九六 Edkins 『地志啓蒙』(愛知大学)

周振鶴は、周一九九八aの中で、筆者の論文に言及すると同時に、以下にあげるアヘン戦争以前に出版された来華宣教師たちの雑誌に注目すべきことを述べている。

『察世俗毎月統記伝』(Miline 1815-22, BL)

『特選撮要毎月記伝』(Medhurst 1823-26, BL)

『天下新聞』(?)

『東西洋考毎月統記伝』(Gutzlaf 1833-25, 中華書局複製本あり)

こうした雑誌を含む上記の書がもつともまとまって存在するのは英国図書館であるが、八耳一九九五によれば日本国内にもかなりの数が存在する。この点でも日本の研究者は有利な立場にある。なお、荒川一九九七では『大美聯邦志略』まではいちおうの紹介をしたが、その後の江南製造総局での訳語や日本語からの訳語、それに周一九九八aのあげる雑誌類についてはあまりふれることができなかった。これは今後の課題である。

(二) 辞書

専門書とともに辞書も訳語の研究には不可欠のものである。しかし、中国での近代語研究において、以下にあげる辞書は一部をのぞきほとんど使われていない。R. Morrison から J. Doolittle は稀覯であるからともかく、『華英音韻字典集成』以下は、中国の古書店を時間をかけてさがせばみつからないものでもないののである。マッシーニは R. Morrison の中国語辞典を利用したと述べているが実際に引用しているのはそのⅡ部の『五車韻府』のみで、これはのちの版の可能性がある。また、Lobscheid からの引用は漢英字典(一八七一)のみ、それに J. Doolittle の辞書が使われているにすぎない。

ロフシャイトまでは以下の官話との辞書が重要である。

〇1815-23 R. Morrison, *A Dictionary of Chinese Language*

〇1842-43 W. H. Medhurst, *Chinese and English Dictionary*

〇1844 S. W. Williams, *English and Chinese Vocabulary*

in the court dialect 『英華韻府歷階』

〇1847-48 W. H. Medhurst, *English and Chinese Dictionary*

〇1866-69 W. Lobscheid, *English and Chinese Dictionary*

日本国内の英華・華英辞典の所在と書誌を調査した飛田・宮田一九九七によれば、モリソンの辞書は日本国内の

公共図書館に約一五点、メドハーストの漢英は一〇点、英漢は九点、ウイリアムスは五点、ロブシャイトは約八〇点存在する。このうち、モリソンはゆまに書房から、メドハーストの漢英とロブシャイトの英華は東京美華書院からすでに複製版が出ている。九八年秋に大空社が刊行を開始した『英華・華英辞典集成』（那須雅之鑑修）は、上記モリソン、メドハースト、ロブシャイトの辞書とあわせることで初めて真の「集成」となる。ともかく、お金と時間がかかるとはいえ、日本の研究者が資料検索において外国の研究者より有利な条件にあることはたしかである。

さて以下はロブシャイト以後のものだが、この時期になると在華宣教師たちの訳語統一の試みを反映した辞書もあらわれる。ドーリトル、マティア、ヘメリングたちのものがそうである。

ロブシャイトの辞書に収録された語はのちに鄺其照の一連の辞書や『華英音韻辞典集成』に継承されていくが、それが現代中国語にどれほど引き継がれているかはまだよくわかっていない。なぜなら、沈国威一九九四（一九五頁）によれば、英華辞典は日本の英和辞典の影響を受けることで英漢辞典として生まれ変わるからである。近年ロブシャイトが英華字典を編纂する際、堀達之助の『英和対訳袖珍辞書』（一八六二）を利用したことが明らかになってきたが、現在のところその影響を過大視することはできない。日本

語からの影響はむしろ堀↓ロブシャイトという経路ではなく、以下にあげる『新爾雅』、顔惠慶やヘメリングそれに『辞源』以下の辞書を通して行なわれたからである。

○1872 J. Doolittle, *Chinese Language Romanized in the Mandarin Dialect* 『英華萃林韻府』

○一九〇二 華英音韻字典集成

○一九〇三 『新爾雅』（白帝社、台湾文海出版社）

○1904 C. W. Mateer, *Technical Terms*

○一九〇八 顔惠慶『英華大辞典』

○1916 K. Hemeling, *English-Chinese Dictionary of the*

Standard Chinese Spoken Language (官話)

○1913 Morgan, *New Terms & Expression*

○1914 Mateer, *New Terms for New Ideas*

○一九一五 『辞源』（商務印書館）

○一九二七 『総合英漢大辞典』（商務印書館）

○一九三七 『辞海』（商務印書館）

○一九四八 『増訂総合英漢大辞典』（商務印書館）

二 学術用語の研究は

学際的でなければならない

近代語、学術用語の研究は従来どちらかといえば国語学者が中心になって行なってきた。科学史家も関心が全然な

かったわけではないが、科学史家にとって大切なことは概念の形成史あるいは原語そのものにあるようにみえる。したがって、かれらにとって訳語の初出にこだわる国語学者や、しばしば「古典にレファー」しようとする中国人学者の態度はあまり意味のあることのようにみえない。

しかし、方法、関心のありかたの違いはともあれ、学術用語というのは必然的に学際的な協力を必要とする。われわれにできることは、いかにして自己の専門の特色を生かしたアプローチができるかである。

学際的な協力が必要なことの一つは、ある分野ですでに自明のことが、他の分野で論争の対象となることがあることである。たとえば「病院」という語が和製漢語かどうかということが八〇年代に国語学者の間で論じられたことがあるが、この問題は四分の一世紀も前に地理学者の鮎沢信太郎が先の「職方外紀」にあることを指摘していた。

「化学」という語は国語学者の研究においては「格物入門」(一八六八)がもっとも古い例とされていたが(古田一九六三b)、かつて中国科学史にも関心をよせていた中国思想史家の坂出祥伸はその初出例が「格物入門」よりも前の『六合叢談』(一八五七)にあることをつきとめ(坂出一九七〇)、その論文は科学史学会の機関誌である『科学史研究』に掲載された。しかし、国語学の分野ではどうも知られることがなかったようで、国語学者の佐藤亨は『六合叢談』

の語彙について調査した論文(佐藤一九八六)の中で「化学」の存在は指摘するものの、坂出論文には言及していない。マッシーニがあげる「化学」の初出例もなぜか「格物入門」となっている。

「化学」の初出は近年劉広定や八耳俊文の研究によって、『六合叢談』の編集にかかわっていたワイリーや中国人協力者である王韜たちが一八五五年ごろに使っていたということがわかってきた。劉広定によれば王韜の日記の咸豐五年(一八五五)一月一四日の項に「化学」が出てくるという。

しかし、にもかかわらずこの分野ではもう一つ別の要因によって、「化学」初出の問題が混乱の状態を呈している。それは中国化学史界の重鎮である潘吉星が提起した「化学」「格物探原」初出説である。「格物探原」にはたしかに「化学」が出てくるが、潘はいくつかの根拠をもとに同書の成立年代を一八五七から五八年の間とし(潘一九八一)、他の中国の化学史家たとえば袁翰青もこの説を踏襲し、さらにはその活字本の影印さえあげた(楊根一九八六)。しかし、この活字本が潘一九八一が見たものと同じとすれば、それは一八八〇年出版のもので、これを根拠にする意味がわからない。日本の科学史家菅原国香は早くから潘の説に疑問をいだき、国立国会図書館等での調査に基づき、同書は一八七六年(光緒二年)以前にさかのぼらないことを主張した。台湾の学者劉広定はおそらくこうした日本の学者の

説の影響をうけたのであろう。劉一九九一において潘らの説をしりぞけ、光緒二年説をとった。ちなみに八耳一九八六の目録でも『格物探原』はこの光緒二年版しかあがっていない。筆者の蔵するものもまた光緒二年版である。したがって、「化学」「格物探原」初出説はすでに成立しないとわかってよい。

もう一つ例をあげよう。「電気」は国語学者の間では『博物新編』(一八五五)がもつとも古い資料と考えられているが(古田一九六三b)、科学史家の八耳俊文は在華宣教師マッゴウアン(D. J. Macgowan)の伝記をたどる中で「電気」という語が『博物通書』(一八五一)という書にあることをつきとめるとともに、日本での伝播定着過程についても緻密な考証を行なった。(八耳一九九二)『博物通書』の写本は早くから知られていたが、刊本の存在は長くわからなかったものである。八耳一九九二は刊本の所在をつきとめるとともに、写本の所持者、写本間の関係をたどることで、「電気」の伝播定着過程を追究した。同論文は紀要に発表されたもので、国語学者の目にはなかなかふれることのできないものゆえ、ここにわざわざ紹介することにした。

三 造語論からのアプローチ

語の起源を追究する過程で、初出例を追いかけることは避けられない作業の一つではあるが、そのことだけをもって探索の目標と考えてはいけない。わたしたちはそれと同時に、その語がいかにつくられたのかという問いを発しなければならぬ。荒川一九九七は中国語研究者として、造語論からのアプローチを試みたものだが、ここではそれを原語との関連から整理し、新しい資料を加えて考えてみたい。

(一) 原語との関係

ここで問題にしている近代日中学術用語というのは、いわば近代西洋語が東洋でいかにして漢語によってつくられたかという訳語創出にかかわる問題である。したがって、そうした語の創出者の頭にはまず原語というものがあつたにちがいない。

(1) ラテン語

中国語の近代翻訳史を考える上で、仏典の翻訳つまり訳経史はその先行史ともいえるものであるが、ここではそこまでふれる余裕がない。今わたしたちにとつて関心の対象となる最初のもの、一六世紀末以降のイエズス会士によ

る翻訳活動で、当時かれらが依拠した原語とはラテン語であった。このことをリッチの『坤輿万国全図』を例に考えてみよう。

荒川一九九七で筆者は、リッチが「温带」を「正帯」としたことの理由として、ラテン語の原語 *zona temperata* の *temperata* が本来温度そのものを指すのでなく「当を得た、中庸の」という意味であったからであると述べた。これはラテン語と対照してはじめてわかったことである。では「熱帯」はどうであったのか。「熱帯」のラテン語は *zona torrida*、*torrida* (*torridus*) とは本来「乾ききった、灼熱の」という意味であった。ところで地球を球体と考え、地帯の観念を発達させたのはギリシア人であり、その頂点はアリストテレスの「氣象学」であった^⑩。ウイリギリウスの『農耕詩』(Georgics)ではそれをつぎのように描写する。

天空をとりかこむ五つの地帯がある。その一つは、赤熱の太陽のため常に燃え、炎のために常に焦熱である。またそれをとりまいて、左右のいちばん外側には、青色の氷にとざされ、陰うつな風のたれこめている二つの地帯がひろがっている。これらの(地帯)と真ん中の地帯とはさまれた二つの地帯は、神々の恩恵によつて、不幸な人間たちに与えられている。

リッチは「乾坤体義」で「熱帯」を使い、アレニも『職方外紀』でこの語を継承したが、以上の説明からすると「熱

帯」という訳はやや不適切ではなかったろうか。というのは中国語の「熱」とは「アツイ」とはいえ、火傷をしそうなあつさである「燙」とは区別されるし、熱湯が「開水」であるのに対し「熱水」とは適度な暖かさをもった湯のことだからである。ちなみに、ロブシャイト字典で「熱帯」(*torrid zone*)にかぶせられた形容詞 *torrid* の訳語には「熱」とならんで「燥、燥熱」が出てくる。「熱帯」は「燥帯」と訳されてもよかつたのではないか。ところで、リッチが『全図』の注記を書くに際し参考にした資料の一つであるペドロ・ゴメスの『天球論』は、日本では日本イェズ会の翻訳天文書『儀略説』(一七世紀後半成立)となつて残つたが、ここでは「熱帯」は「暑帯」だけでなく「赤帯」とも訳されている。これもラテン語の原義を意識したものである。

あといくつか気づいた点を述べよう。荒川一九九七では「熱帯」の「帯」をオビからの比喩義と考えたが、実はラテン語の *zona* 自身本来オビのことであった。したがってリッチにとつて *zona* から「帯」への結びつきはきわめて容易なものであつただろう。さらに、前著ではリッチが地理学用語をつくる際、すでに高度に発展をとげていた中国の天文学用語を転用したとのべたが、西洋においても、地球につけられた名称は多く天球につけられた用語からきていたのである^⑪。

(2) オランダ語

江戸日本における翻訳はオランダ語を介するもので、その翻訳法の一つとして逐語訳、直訳法があることが早くから指摘されていた。斎藤静一九六六『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』(篠崎書林)からいくつか例をあげよう。

anttrekings(引く) Kracht(力) || 引力

parden(馬) Kracht(力) || 馬力

dieren(獣) riem(帯) || 獣帯

hoorn(角) vles(膜) || 角膜

net(網) vles(膜) || 網膜

twalf(十二) vingerigen(指) darm(腸) || 十二指腸

江戸日本の地理学におけるオランダ地理学の遺産については石山一九六二に詳しいが、オランダ語そのものからきている地理学用語はそれほど多くはない。《太平洋》は広瀬元恭『理学提要』では「静海」と訳されているが、これはオランダ語の De Still Zee を訳したものである。もっともこれは現在につながっていない。もう一つは「半島」で、これは山村才助『訂正増訳采覧異言』(巻二一一二ウ)に引くように、オランダ語 half(半分) eiland(島) からつくられた。

(3) 英語

「貿易風」が trade wind の直訳であることは容易に理解できようが、trade wind がもと「一定の風、季節風」と

いう意味であったため、中国では、

「恒信風」(『博物新編』一八五六)

のように訳されたこともあった。『博物新編』には「恒信風」の注として「また俗に貿易風とも呼ぶ」ともいう。「貿易風」は原語の意味の変化とともに、俗称が正式の名称となったものである。

「海流」は ocean current の訳語として明治二〇年代に日本で生まれた。もともと《海流》を表す原語はもとは stream であったため、中国では、

「流」(『新釈地理備考』)

「平流」(『地理全志』)

「河流」(『格物探原』)

「水溜」(『地志啓蒙』)

のような名称がつけられていた。「海流」の登場は、原語が stream から ocean current に変わってのちのことである。もともと、ocean を「洋」、sea を「海」と訳し分ける必要から一時期は「洋流」という語が使われた時期があったが、のちに日本では「海流」が、中国では「洋流」が優勢になった。

「盆地」の原語は basin、bowl ほど深くはない容器のこととて、これが英語では地理学用語に転用された。日本の「盆地」の初出は明治二八年(一八九五)の山上正次郎編『地

学字彙 英独和之部」(『地学雜誌』七—七五付録)である。

「盆」は日本語では浅いトレイのような容器を指すのに basin の訳語に使われたのは、日本語に入って意味変化する以前の中国語での「盆」の意味にしたがったものである。「覆水盆に返らず」の盆である。ちなみに、明治二四年の日本初の国語辞書、大槻文彦の『言海』には、

(一) ヒラカ、瓦器ノ平形ノモノ、鉢。

(二) 今、専ラ、木製、方円の扁平ナル器。縁、浅シ。物ヲ載スル用トス。承盤

とある。明治期日本の英和辞書でよく利用された、柴田・子安の『附音挿図英和字彙』(日就社、明治六)に、

Basin (下線 明治一五、第二版から) () 内ふりがな

盆(ボン) 盂(ハチ) 瓶(カメ) 澡盤 池(イケ)
入船所(フナイレバ) 圓谷(マルキタニ) 天秤盤
(ハカリザラ→テンピンサラ)

とあるのも、basin に「盆」をあてた根拠になるだろう。ちなみに『附音挿図』の訳語はロプシャイトの英華字典の影響を色濃く受けたもので、訳語の「盆」は英華字典からとった可能性が高い。

(4) ドイツ語・フランス語

ドイツ語からきたものとしては Icelberg → 「冰山」があるが、問題はこれが『職方外紀』(一六三三)にすでに現れているという点である。すなわち、

又苦氷山、海中氷塊為風所擊、堆疊成山 (巻五)

とある。これは「氷の山→冰山」というつくられ方をしたものである。一九世紀になるとメドハーストやロプシャイトの辞書、『地理全志』にも現れるが、これらは『職方外紀』とは別にドイツ語経由でつくられた可能性がある。

フランス語起源としては glacier 「氷河」がある。これはフランス語 glacier 「氷」の派生語で、ロプシャイト英華字典などは、

氷田 山上氷田

というような造語をしているし、現代中国語でも、

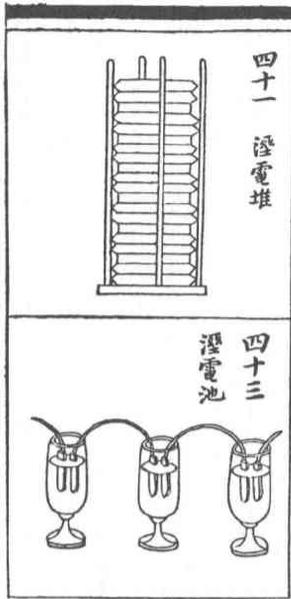
氷川

と、日本とはちがう語をつくっている。これらは原語の直訳というより、その形状に基づいてつくられたというべきであろう。

(5) かたちからもつくられる

電池

河辺浩一九七七によれば初出はマーティンの『格物入門』(二八六七)である。原語は battery、本来「打つもの」の意で、「電池」はこれを直訳したものではない。むしろ「電の池」から「電池」ができたのだろう。「電の池」は今の乾式の電池からは想像がつかないが、もとは湿式電池すなわち電解質溶液に金属片をつけたものからきている。『格物入門』には次のような図をのせている。金属片を積み上



『格物入門』 卷四「電学」

げたものは「電堆」と呼ばれ、電解質溶液をいれたところが「池」というわけである。こういうと「池」とは大きなものをいうのではないかという疑問がおこるのであるが、中国語の「池」が、

便池（便器のためるところ） 花池（花壇） 浴池（銭湯） 楽池（オーケストラボックス） 舞池（ダンスホール）

のようなものにつながっていることを考えると理解できるだろう。日本語でも硯の水をためるところは「イケ」という。「電池」は原語よりも、そのものの形状に着目してつくられたものである。

山脈

同じことが「山脈」についてもいえる。原語は mountain chain [range] の chain（つながったもの）あるいは range（ならんだもの）からは「脈」は出てこない。山が人の経絡のようにつづくさまになぞらえてつくられたものである。そもそも「山脈」は本来風水の用語である。村落の立地条件として、村落が寄り添う山並が延々と起伏してさながら動く龍のようであることを理想とする。この語は風水の書に見られるほか、明の徐弘祖の『徐霞客遊記』『粵西游日記一』や『朱子語類』にみえる。

随山脈登海陽庵、飯而後行、已下午矣

（『徐霞客遊記』『粵西游日記一』）

山下有水、今浚井底人亦看山脈（『朱子語類』卷二）

『六合叢談』『地理』（二八五七—一三）にみえるつぎ

の「山脈」も中国の伝統的な用法にしたがっている。

地面之形状四也、山脈之方向五也

これは気候（地気）を形成する条件の一つとしてあげたものである。しかし、これが現在の「山脈」であるかは疑問がある。というのは、『六合叢談』には「山原論」（一—一五）というものがあながら「山脈」については特に論じていないからである。

近代地理学用語としての「山脈」はむしろ江戸日本の蘭学者の書に先にみえる。

○箕作省吾・阮甫『坤輿圖識補』（弘化三・一八四六）

亜墨利加ノ、暗得大山脈中ニ、処々火坑アリ

（卷一 輿地総説）

○宇田川榕精『万国地学和解』（慶応四・一八六八）

（山）ハ、地ノ著大ニ海面ヲ抽出スル者ニシテ、（山脈）

ハ其連続スル者ヲ云フ （五才）

ただし後者はアメリカ人の地理書を訳したもので、（山脈）の横には「チャレランモウンタイン」とふりがながついている。

ところで、西洋人たちのつくった地理書には「山脈」が出てこず、それにかわるものと考えられるものは「山嶺」であった。そこで、荒川一九九七（二五四頁）では、『地理全志』の「山嶺」を「山脈」を表すものと位置づけた。そのときは傍証がなかったが、のちにフライヤーの『地志須知』（一八八二）に、つぎのようにあることに気づいた。

山嶺 地面上有土石高起者為山、数山相連而長者為嶺

（第一章）

同書の地図にも「烏拉嶺」（ウラル山脈）が出ている。また最近の『五種語言 地理学詞彙』（商務印書館、一九九二）では、〈山脈〉にあたるものとして「山脈」以外に「山嶺」をあてている。

四 語構造からのアプローチ——「化石」

以上は主として原語との関係から造語の問題を考えたが、つぎに「化石」という語を例に語構造の上から、ことばがどうできるかという^①ことを問題にしてみたい。「化石」が日中どちらでつくられた語であるかはかねてから気になっていた。それは、歌代・清水・高橋一九七三『地学の語源をさぐる』（東京書籍）に、つぎのような記述があったからである。

「化石」の語は日本でつくられた言葉で（漢語としては、こんな言葉はありえない）、……平賀源内や司馬江漢が使った例がもつとも古く知られている。（四二頁）
「漢語としてこんな言葉はありえない」とはどういうことか、そこではそれ以上の説明がないが、のちに、筆者の一人、清水大三郎一九九六『古典にみる地学の歴史』（東海大学出版会）では、

漢語では化為^②石とか化^③石という語はあっても、名詞としての化石という語はありえない（一三九頁）
と補足的説明がされた。氏は語学者でないので説明のことばに窮したのであるが、これは要するに中国語としての「化為石」「化石」は語ではなくフレーズ（あるいは連語、句）というべきなのである。劉昭民『中華地質学史』（台

湾商務印書館、一九八五）をひもとけば、「化為石」というフレーズとして例は、古くからいくらでも存在することがわかる。先に問題にした「職方外紀」にも、

皆昔時避乱之民穴居於此、死後為氣所凝、漸化為石

(卷一 土爾格)

のような例がみえる。ところで、問題はこれが「化石」となったときに語となるかどうかということである。

実は「化石」は方以智の『物理小識』（一六六四）巻七の「金石類」に表題として出てくるのである。『物理小識』は江戸時代日本にもたらされ日本の博物学者たちに影響を

化石○頤介海槎錄崖州榆林港土賦策寒蟹入不能動
久之則成石矣外紀那多理亞國有瓊石穴人往鑿之見
石人無翼皆首避亂之民爲寒氣所凝漸化為石他如松
之化石石之似梅似柏皆不足訝也唐書言回紇攻野有
斷松入康干河成石杜光庭言婺州永康縣有松墮水爲
石曹能始名勝志四川永川縣來蘇鎮有松化石燕京萬
仞海曲水園南京任伯受家俱有松化石姚寬言通遠軍
潭源曰焉有水中類魚鳴人以槌切擊之或化為石曰覓
石長尺餘直一二千緡善磨乃光而不斂

『物理小識』

あたえたとされる書である。では、ここではすでに単語なのであろうか。筆者は中国語としての「化石」はあくまでフレーズであったと考える。『物理小識』の表題は、「異石」「養珠法」「化鉄法」のようなものもあるが、「硝皆地出」「寶石不」「鉄成銅」「銅錫鑄劍」のようにフレーズ形式のものもあるからである。ただ問題は「人名柏化石」「有松化石」のようなものをどう解釈すべきかである。「柏化石」や「松化石」が単語であることは否定できない。では、だからといって「化石」も単語かというところはいかない。それは「化石」というときと「松化石」というときとは全体の構造がちがうからである。つまり、「化石」は中国語としてはあくまでフレーズだが、「松化石」は「松が化した石」ととらえるべきなのである。もし「松化石」が「松石二化ス」だとするとこれは「主十動十目」の構造となるが、このような構造の語は「腎結石」「肺結核」等の医学用語をのぞいて現代中国語には存在しない。しかも、これらの医学用語は日本語から入った可能性が高い。マツシーニは「化石」を偏正構造の語ととらえているが(Masumi, 1993)、これは興味ある指摘である。というのは「化石」は本来の構造からいえば動賓構造の語の一種としかいえないのだが、このような構造をもった語は中国語に他に例がないからである。では、なぜこのような語が現代中国語に存在するのか。それは江戸日本の博物学者たとえば平賀源

内、司馬江漢、それに木内石亭らが『物理小識』を読み、そこにあつた「化石」というフレーズを単語（一種の石）と思ひこみそのまま使用し続け、それが明治維新後専門用語として確立し、さらに中国へと伝わつたからである。「化石」の専門用語としての意味は明かで、そうして確立した「化石」は専門用語としての権威性から、その本来の構造を疑われることなく中国語の中に入つていったというわけである。

注

- 〈1〉『現代漢語外来詞研究』が日本語起源と誤つた語については宮田一九九二、一九九八に指摘がある。また『漢語外来詞詞典』のまちがひについては沈一九九四、一四六、三五五頁を参照。
- 〈2〉山田孝雄一九四〇、古田一九六三a、b。
- 〈3〉下河部行輝一九九四によれば上海図書館、北京大学図書館にもあるとのことである。
- 〈4〉荒川一九九七、二七五頁の注三四を参照。
- 〈5〉鄭其照の辞書はもともメドハーストの辞書の影響を受けているといわれていた（この点については森岡一九六一、五六頁）。宮田一九九八bはそのことを具体的に指摘するとともに、鄭の何種かのバージョンの収録語を比較したものである。また、内田一九九八によれば、鄭のその後のバージョンではロブシャイトの影響もあるという。

- 〈6〉中山一九九二。
- 〈7〉鮎沢一九五九、八一頁。
- 〈8〉八耳一九九六、参照。
- 〈9〉石山洋一九八五にこの経過の紹介がある。
- 〈10〉以下、織田武雄一九五九、二二一頁による。
- 〈11〉同前。
- 〈12〉この指摘は斎藤毅一九七七、四九頁にみえる。
- 〈13〉「半島」については荒川一九九七、一九頁を参照。
- 〈14〉「貿易風」については荒川一九九七、第六章を参照。
- 〈15〉「海流」について詳しくは荒川一九九七、第五章を参照。
- 〈16〉「盆地」については荒川一九九八aで詳しく述べた。
- 〈17〉『朱子語類』の例とともに、大阪市立大学の三浦國雄氏（中国思想）からの教示による。
- 〈18〉以下は荒川一九九八bを補訂したものである。
- 〈19〉中国では『地学浅釈』（江南製造総局、一八七二）の「化石」が使われた時期もあつた（これは日本にも伝わつた）が、のち日本来源の「化石」がこれにとつてかわつた。

参考文献

- 秋岡武次郎 一九八八 『世界地図作成史』 河出書房新社
- 鮎沢信太郎 一九四四 『日本文化史上に於ける利瑪竇の世
界地図』 龍文書局
- 鮎沢信太郎 一九五九 『山村才助』 吉川弘文館

- 荒川清秀 一九九七 『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に——』 白帝社
- 荒川清秀 一九九八 a 『漢字の意味の歴史性——『盆地』考』 『学鏡』三月号 九善
- 荒川清秀 一九九八 b 『ことばのゆくえを追う』 『しにか』五月号 大修館書店
- 石山洋 一九六二 『蘭学におけるオランダ地理学』 『地理学史研究』Ⅱ 柳原書店
- 石山洋 一九八五 『潘吉星教授・用語〈化学〉および〈植物学〉の初期使用に関する新資料に接して』 『科学史研究』春号
- 内田慶市 一九九八 『鄭其照の『華英字典集成』』 『関西大学中国文学科紀要』第一九号
- 織田武雄 一九五九 『古代地理学史の研究』 柳原書店
- 河辺浩 一九七七 『漢語』 『電池』の考証』 『言語生活』三〇六
- 斎藤毅 一九七七 『明治のことば』 講談社
- 坂出伸祥 一九七〇 『「六合叢談」にみえる化学記事』 『科学史研究』第九三号
- 佐藤亨 一九八三 『近世語彙の研究』 桜楓社
- 佐藤亨 一九八六 『幕末明治初期語彙の研究』 桜楓社
- 沈国威 一九九四 『近代日中語彙交流史』 笠間書院
- 下河部行輝 一九九四 『『海国図志』と『亞墨利加総記』全とをめぐって』 『洋学資料による日本文化の研究』 吉備洋学史研究会

- 飛田良文・宮田和子 一九九七 『十九世紀の英華・華英辞典目録——翻訳語研究の資料として』 『国語論究』六 近
- 代語の研究 明治書院
- 古田東朔 一九六三 a 『訳語雑見』 『国語研究室』第二号 東大国語研究室
- 古田東朔 一九六三 b 『幕末明治初期の訳語』 『国語学』五 三集
- 宮田和子 一九九二 『日本からの移入とされる中国語』 『武蔵野文学』三九 武蔵野書院
- 宮田和子 一九九八 a 『鄭其照『字典集成』の系譜』 『中国研究月報』六〇三号 中国研究所
- 宮田和子 一九九八 b 『現代漢語外来詞研究』再考(1) 『英学史研究』第三二号
- 中山茂 一九九二 『近代西洋科学用語の中日貸借対照表』 『科学史研究』一八一号
- 森岡健二 一九六九 (改訂一九九二) 『近代代語の成立 明治期語彙編』 明治書院
- 八耳俊文 一九九二 『漢訳西学書『博物通書』と電気の定着』 『青山学院女子短期大学紀要』第四六輯
- 八耳俊文 一九九五 『清末西人著訳科学関係中国書および和刻本所在目録』 『化学史研究』第二二卷第四号 化学史学会
- 八耳俊文 一九九六 『重学浅説』の書誌学のおよび化学史的研究』 『青山学院女子短期大学紀要』第五〇輯
- 山田孝雄 一九四〇 『国語の中における漢語の研究』 宝文

- 王家榕 一九九七 「鳥瞰馬禮遜詞典」『出版史研究』第五号
- 周振鶴 一九九八 a 「『東西洋考每月統記傳』在創製漢語新詞方面的貢獻」『詞庫建設通信』一六
- 潘吉星 一九八一 「談「化學」一詞在中國和日本的由來」『情報學刊』第一輯（潘吉星一九九三、第七章）
- 潘吉星 一九九三 「中外科學之交流」（香港）中文大學出版社
- 劉広定 一九九一 「格物探原」与韋廉臣的中文著作」『近代中國科技史論集』中央研究院近代史研究所 國立清華大學歷史研究所出版
- 楊根 一九八六 「徐寿和中国近代化学史」化学技術文献出版社
- P. M. D'Elia 1938 II Mappmondo Chinese del P. Matteo Ricci S. I.
- F. Masini 1993 The Formation of Modern Chinese Lexicon and its Evolution Toward a National Language: The Period from 1840 to 1898. *Journal of Chinese Linguistics Monograph Series*, No. 6. 黄河清訳 一九九七 『現代漢語詞彙的形成』漢語大詞典出版社